

あおぞら

発行：愛知県被災者支援センター

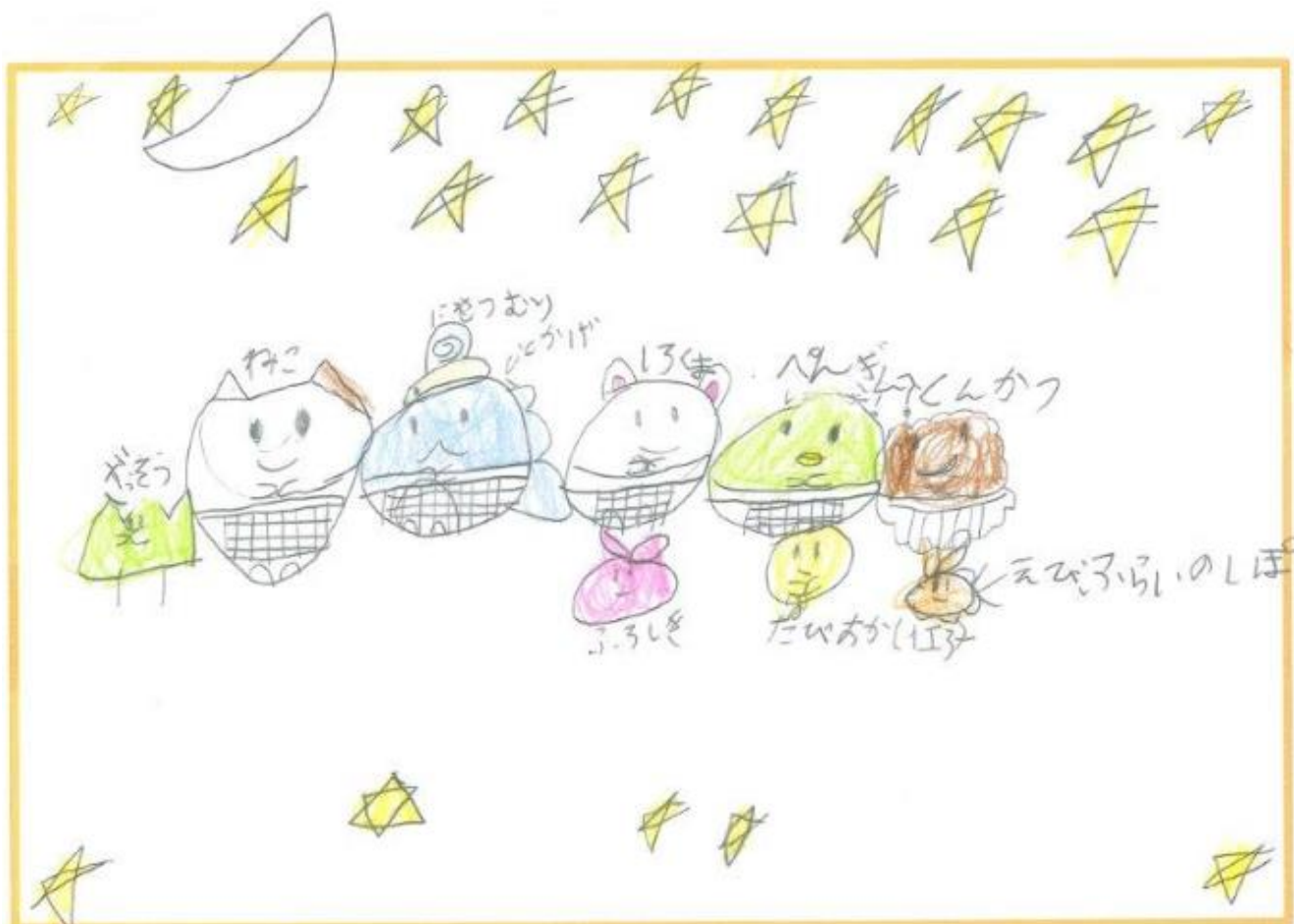
住所：名古屋市中区三の丸 3-2-1

愛知県東大手庁舎 1階

TEL：052-954-6722

FAX：052-954-6993

開館：月曜～金曜 10時～17時



ペンネーム しろくま

《表紙の絵/作品/写真 募集中！》

①絵/作品/写真のタイトル、②簡単な説明、③掲載する氏名またはペンネーム、年齢、④連絡先（氏名、メールアドレスまたは電話番号）を明記のうえ、メールまたは郵送にてお送りください。

●E-mail：

aozora@aichi-shien.net

メールフォーム➡



《もくじ》

写真特集

Day to Day わたしたちの今。ふるさとの今。・・・2-3

インタビュー

宮城県→田原市 山本美貴子さん・・・4-5

名古屋工業大学ボランティア部 お礼の会・・・6

東日本大震災追悼式・・・・・・・・・・7

4月イベント情報・・・・・・・・・・8

さっちゃんのレシピ

大根と生姜炒め・・・・・・・・・・8

写真
特集

Day to Day

わたしたちの今。ふるさとの今。



ボランティアセンターなどや協力の「革工芸の会」に参加しています。これまでに、ペンケースやスマホケースを作りました。レザークラフト用の道具を使って穴をあけ、ひと針ずつ糸を通して作ります。

写真は、これから小銭入れを作るところです。（岩瀬）



名古屋市在住の方には、「被災者支援ボランティアセンターなどや お知らせ」を同封し、開催のご案内をしています。

名古屋市外にお住まいの方で興味のある方は、愛知県被災者支援センター（052-954-6722）までご連絡ください。

4年生から3年間、男子の中でたったひとりでサッカー部を続けてきました。

サッカーを始めてから、点を入れた時の喜びや嬉しさや、チームワークの大切さが学べました。

4月から中学生です。中学校には、サッカー部がありませんが、違う部活でまたがんばりたいです。（ミミ）



私の夫は震災があった2011年まで大学と高校で美術講師をしていました。専攻は彫刻(石彫)。毎日石と向き合い、学生と向き合う毎日を送っていました。

それが震災を境に転職をし、愛知県へ移住しました。愛知へ来てから、夫が制作をすることはなく、声楽家である私だけが活動を再開していました。

そんな夫が2018年から制作を再開しました。大きなアトリエを持っているわけではないので、自宅で制作できるサイズの石の作品と、絵画です。有り難いことに昨年末に展示の機会を頂き、作品が一つお客様の手に渡りました。この3月にも展示の機会を頂いているので、只今制作真っ最中の夫です。(文:竹内 支保子)



大理石で制作。

題名

「象の夢」



スプリング展2019

会場: THE BLUE-BOX GALLERY
(岡崎市朝日町4-98)

期間: 3月7日(木)~3月31日(日)

※月・火・水は休み

開館: 12時~18時

※最終日は17時まで

震災から6年パパと
離れて過ぎていたけど
名古屋に来てからは
毎日一緒☆

3月16日がパパの誕生
日だから2人でプレゼン
ト作ってまーす♡

(はっちゃん)





東日本大震災チャリティー展覧会「Takuya.y & Mikico.y ART Show ～3.11 HOPE MARKET～」を訪れました。園芸植物とインテリアを販売するお店の一角、自然の優しさを感じる雰囲気の中で、主催の山本美貴子さんと拓也さんにお話を伺いました。美貴子さんは宮城県女川町で被災し、田原市へ。その後チャリティー活動を通じて出会った拓也さんと再婚されました。

美貴子さん（以下、美と表記）：例えばこの絵は、

「震災で家の上に家が
あってまた家があって、
という普通じゃない景
色で、それでもいつの
間にか花が咲いたり、自然
は再生していく」という
思いと、不安だった気持
ちを思い返しながら描
いています。けれど、観
てくれる人は、そういう思いを全然知らずに、「お
もしろい」「いい絵だから」と、そう言ってくれ
ますね。観る人は、そんな思いで描いているとは
わからないだろうし、自由に観て何か感じてもら
えたらいいです。



——昨年新聞記事で、「悲しい思いがあったか
ら絵を描くようになった」と読みました。

美：津波の後って、最初は色がグレーだったんで
す。避難所はみんなでわいわい頑張ろうという雰
囲気の中から、仮設住宅の生活になって自分の時
間ができて、考えてもプラスなことがなにもなく
てすごく不安でした。それで黙々と絵を描き始め
たんです。ほんとに辛くて、女川町にいられなく
て引っ越しました。でも「逃げたんじゃない」っ
て思いがあることを形にしたくて…。最初は知り
合いのサーフショップが「置いてあげるよ」と言
ってくれたので、そこから売り始めました。大き
いところに寄付しても何に使われているか分か
らない人が多かったので、「それだったら私が架
け橋になろう」と故郷に寄付することを決めまし
た。支援してくれる人の顔も見れるし、故郷に帰

たときに直接支援すると被災地の人たちの顔も
見れるので、そういう“役”になろうと思って、毎
年やっています。

——女川町へ寄付されていますが、どんな活動に
渡していますか？

美：当時中学生の息子も関わっていた「いのちの
石碑プロジェクト」に寄付しています。これは、
「1000年に1度の震災だけど、1000年後の子ど
もたちにこんな悲しい思いをさせないように」と、
子どもたちの案で避難道を作ったり、「ここより
先に逃げて」とメッセージを書いた大きな石碑を
津波の到達点に残していく活動です。その活動途
中で引っ越してきたけれど、気持ちは一緒だと思
って、その取り組みに寄付しています。

それと、気仙沼大島。海が怖くなって、海が苦
手になった子どもたちに、「ほんとうは海は楽し
いんだよ」と伝えるための活動があります。海で
楽しく遊ぶイベントなんですけど、そこにイベン
ト T シャツを作って寄付したり、また、その T
シャツを売ってお金にしてもらっています。



▲美貴子さんと息子の隼くん
(美貴子さん制作の原画の前で)

——田原に引越してきて、活動を始めてから気持ちに変化はありましたか？

美：ん～、変わらない部分とこうやって励まされる部分と。全然反応のないイベントもありますけど、思いがある人は気にしてくれたり、チャリティー展覧会で知り合う方の中にも、「当時、全然寄付とかできてないから」と言っている協力してくれたり、自分の家族を女川に連れて行ってくれる人もいます。そういうときに繋がりを感じ、「やっていたよかった」と思います。

——1人でも知ってもらえるといいですね。

美：あったかい人がいると本当に救われて…。夫とは愛知で知り合って結婚したんですけど、その前に実は会っていて。8月ぐらい、まだ自衛隊のテントで避難所生活を送っていたんですけど、そのときに夫は個人的に物資を配っていました。サーファーと聞いていて、私もサーフィンが好きなんでなんとなく顔は覚えていて。でも名前もどこの人かも知らず。その後、愛知に引っ越してきて、出店しないかと誘われたチャリティーイベントを、今の夫が主催していたんです。「初めまして」って会ったけど、お互い「どっかで見たことあるな～」って感じで。そんな出会いで結婚に至って、今、こうして一緒にチャリティーをやっています。

——偶然を引き付けたのも、こうやって絵を描いて活動を始めたからですね。

美：そうですね。そうじゃなかったら出会ってなかったかもしれないです。

——絵を描くときは、最初に「こう描こう」と決めていますか？何も考えずに描きながら「こんな気持ちだったんだ」と気づかれますか？

美：両方ありますね。「心に着ぐるみを着せる」というか、当時、自分の心もごまかしていないとやっていられない時期もあったので、「着ぐるみ」をキーワードに描いたりしています。

——心の中では「着ぐるみ」を着ていたんですね。

美：家族は無事だったんですけど、30人ぐらい友人やお世話になっていた人が亡くなって。そこにいるのも辛くて、それで引っ越してきちゃって。でも、人の悲しみなんて言っても分からないし、ずっと泣いていても人生がもったいないので、笑っていたいなと思っています。

（ここで夫の拓也さん登場）

美：夫は、震災で亡くなった人の肖像画を描いて、プレゼントしていました。

拓也さん（以下、拓と表記）：ほんと勉強になりました。写真なんて水に濡れちゃっているの、思い出を聞きながら描いて。今でも頼んでくれる人がいればいくらでも描くんですけどね。

——街はどんどん新しくなって、見えなくなっていく部分もありますよね。

拓：今は緊急事態を脱しているわけじゃないですか。だから忘れていっちゃう。自分たちの防災も考えないといけないです。

美：それが家族を守ることにつながるので。

——チャリティーは、被災してない人に防災を意識してもらう意味もあるんですね。

拓：そうそう。

美：チャリティー展覧会に来て話を聞いた人が、頭の片隅には「こんなこと言われたな」と残っていれば、地震があったときに逃げなきゃと思ったり、防災につながってくれるといいです。

拓：家族会議を開いたり。うちなんてしょっちゅう話しをしています。

美：家族でルールを作っておくことが大切です。

Takuya.y & Mikico.y ART Show

～3.11 HOPE MARKET～

会場：garage TOYOHASHI 2階 gareco

（豊橋市曙町南松原 17）

期間：3月2日（土）～3月31日（日）

*ポストカードやTシャツなどの販売もしており、売り上げは、女川町と気仙沼大島での活動に寄付されます。

名古屋工業大学ボランティア部 ☆ お礼の会 ☆

宮城県の方に、河北新報の新聞スクラップ集を作成し続けてくれた名古屋工業大学ボランティア部の皆さん。卒業に伴い部員が減ったため、2019年2月をもって一旦活動を終了されました。そこで、宮城県から避難されてきた押田さんにもお越しいただき、3月7日に愛知県被災者支援センターで「お礼の会」を開きました。その模様をレポートします。

「こんなところまで津波が来るなんて」

仙南地域で暮らし、仙台市や名取市へも出かけていた押田さんは、とても驚かれたそうです。複雑な歩道橋、閑上小学校、小さい橋を渡るとお寿司屋さん…花火を見に行っていた風景は、津波で流されてしまいました。「全部なくなった。あの光景と今の光景は違う」ため、受け入れるのには時間がかかったそうです。

地震が発生したときは、友人を乗せて運転していた押田さん。その後、余震が続き岩などが落ちている恐怖の中、やっとの思いで山道を抜けることができたそうです。避難途中で寄ったコンビニでは、レジが使えなかったため、小銭は持っていたほうが良いと教訓を教えてくださいました。ほかにも対策として、鞆の中には、笛と小さい懐中電灯を入れて持ち歩いています。

押田さんから「ずっと続けてくれてありがとう」と感謝の言葉を述べられ、学生からは「先輩たちのおかげで続けられた」と謙虚なお返事がありました。

押田さんの言葉ひとつひとつに耳を傾け、気持ちを受け止めた学生たち。4月から3年生の本田くんは、新入生を集めて再開できるようにがんばってくれるようです。



入部のきっかけや活動を通して

ボランティア部の友人が活動を通して成長している姿を見て、私もそのようになりたいと思い、入部を決めました。実際の活動は地味な作業が多く、当初は自分がやっていることに疑問を感じていました。しかし、新聞スクラップにおいても活動から7年以上が経った今でも70世帯もの方々が読んで下さったこと等を振り返り、多少なりとも皆様のお役に立つことが出来たのではないかと思います。(米田 洸太)

私がボランティア部に入部したのは、友達に誘われたことがきっかけです。当時は、ボランティアに対し熱意があったわけではなく、活動を通して色々な方と接する中でやりがいや楽しさを感じ始めました。特に、入部当初から続けてきた新聞スクラップには思い入れがあり、押田さんのように最後まで手に取って下さった読者の方には大変感謝しております。3月で卒業を迎えますが、また違う形で社会や多くの人に貢献できるよう頑張ります。(本間 俊作)

活動を経て「震災は決して過去の出来事ではない」という事を痛感しました。河北新報の記事を切り抜いていく中で今でも震災の傷は癒えていないという事。また、その中でも東北の地で懸命に頑張っている人が居るという事を知りました。これまでテレビのニュースで何処か遠くの出来事であるように感じていた東北の姿をとて身近に感じました。僕は「東北で今も頑張っている人が居ますよ!」というメッセージを伝える事が出来たら良いなと思い活動を続けてきました。その気持ちを少しでも皆さんにお届けする事が出来たのなら幸いです。(本田 泰成)

東日本大震災追悼式

3月11日。今年も名古屋で追悼式が行われ、東日本大震災が発生した午後2時46分に黙とうし、犠牲者へ祈りをささげました。追悼式に出席された被災者の皆さまから、お気持ちをお寄せいただきましたので、紹介します。



今まで避けていた追悼式典に昨年初めて参加し、今年で二回目です。それまでは、現実と向き合うのが怖くて、自分の事だけで精一杯でした。

3月11日は、どうしても涙が出てしまう日。私は、追悼式典に参加し、我慢せず一回思い切り泣く事で、また前を向いて頑張ろうという気持ちになれます。8年前、震災で亡くなられた方々、家族や家を失ってしまった人達を想い、献花し手を合わせ、鎮魂をお祈りすると同時に、生かされた命に感謝し、大切に生きていこうと思いました。
(青木 幸子)

今年も3.11追悼式に参加しました。追悼式の会場で、支援センター、ボランティア、避難者の皆さんと顔を合わせると、心がホッとしました。かけがえのないつながりだなと改めて感じました。

当時の記憶を1人で思い出すのはとても辛い。でも追悼式に行けば皆さんの存在に支えられながら、しっかりと振り返ることができます。家族が元気に過ごせていることへの感謝、災害への備えの大切さを自分の中で風化させないために、また来年も参加したいと思います。
(Y.Y)



今日もこの追悼式に足を運んできました。想像も出来ないほどの、多くの人達が犠牲になりました。あの地獄のような日から8年、この時期が来ると否応無しに当時の映像がテレビから流れ、その度に胸が苦しくなり、身体中が総毛立って呆然とするばかりです。整然とした居間が一瞬にして瓦礫と化しその中になすすべもなく、ただ呆然としている私、今でもあの時の前後の事が思い出せないのです。しかし生かされた命、被災した方達の役に立ちたいと、多くのボランティアの方々のご尽力と努力によりパッチワーク教室を開きました！少しでも慰めになれば、私自身の力になりますし、生徒さん達のお役に立てれば幸いです。また、この命ある限り追悼式に参加して、犠牲になった方々に祈りを捧げます。
(似内 成子)



「あの日をどこでどのように過ごすか、あの瞬間をどうやって迎えるか」これが毎年の課題です。独り自室で、家族でリビングにて等、その年々の出来事などを振り返りながら福島を想い、これからの未来を考える時間です。

今年は、震災がきっかけとなり、知り合うことが出来た素敵な仲間とゆったりと語らい、共に追悼式に参列することが出来ました。

風化が進む中であるにもかかわらず、たくさんの方にお会いする事ができ、また今年も頑張ろうと思いました。
(小野 佳奈)

4 月イベント情報



お花見の季節ですね。当センターの近くにある名古屋市政資料館では、3 月 15 日時点で早咲きの大寒桜（おおかんざくら）が咲き誇っています。

開催日	イベント名	内容	最寄駅
6 日(土)	めぐりあい交流 花見会 2019	桜を愛で、食べて飲んで、語りあい！	地下鉄東山線 ・名城線「本山」

※イベントの一部を掲載しています。その他のイベントや申込先などの詳細は、同封（前月号に同封している場合もあります）のチラシをご覧ください。

さっちゃんのレシピ



大根と生姜炒め

◆ 材 料 ◆

大根：300 g
生姜：15 g（1 かけ）
ちくわ：2 本
油：大さじ 1 杯半
酒：大さじ 3
砂糖：小さじ 1
しょうゆ：小さじ 1



※大根がきれいであれば皮つきでも OK。
※最初に塩でしんなりさせるので、しょうゆの量は調整してください。

◆ つくり方 ◆

- ① 大根は皮をむき、5cm くらいの長さの千切り（繊維に沿って切る）にして塩をふり、しばらく置き、しんなりしたら絞って水気を切る。
- ② 生姜も千切り、ちくわも大根と同じように細く切る。
- ③ フライパンに油をひき、生姜を入れ、次に大根を入れて炒める。
- ④ 油がなじんだら、ちくわ、酒を入れ、水 100cc 程入れて弱火でやわらかくなるまで煮る。
- ⑤ 砂糖、しょうゆを入れて味をととのえる。

編集後記



- ・「さっちゃんのレシピ」のソーダブレッドをつくってみました。美味しい！と家族にも大好評でした。焼き立ての時に切ろうとしたら上手くできませんでしたが、冷めてからやってみたら、きれいに切れました。皆さんもぜひお試しください。(Y.Y)
- ・やはりあの日を思い出しました。私の親せきで幼稚園に孫娘を迎えに行った帰途、孫と 2 人で津波に呑み込まれて亡くなった人がいました。葬式は 8 月のお盆前でした。福島は地震と津波と原発での被災地です。(A.I)
- ・愛知県被災者支援センターに勤めて 4 年になりました。大学で避難者交流会の開催をしていたので、その時に会った方とは 8 年のお付き合いになります。2018 年度からは「あおぞら」制作の担当となり、震災そして避難、正解がない日々を模索して過ごされていることを想像しながら作ってきました。私は、4 月からボランティアとしての関わりに変わりますが、交流会でまた皆さんにお会いできることを楽しみにしています。(H.S)